

分科会②

「コーディネーターになるというキャリアパス
：悩み、葛藤から強みの発揮へ」

コーディネーター | 堀田亮（岐阜大学保健管理センター）

話題提供者 | 川添茜（鹿児島大学障害学生支援センター）、
城月珠美（成蹊大学学生サポートセンター障がい学生支援室）、
森麻友子（和歌山大学キャンパスライフ・健康支援センター）

要旨

障害学生支援の「コーディネーター」という言葉から連想する役割や機能そして理想像は、多かれ少なかれ人によって違うのではないのでしょうか。そして、その違いを生み出す一端は、個人の志向性に加え、対人援助職としてどのような学びやトレーニングを経験してきたかが影響しているのではないのでしょうか。本分科会では、カウンセラーとして研鑽、業務をしていたところ、いろいろな事情、タイミングがあって現在はコーディネーターとして奮闘している3名が登壇し、日々の迷いや葛藤、そして「そんな私の生きる道」について話題提供します。

さまざまなキャリアパスを歩んだ人が集うこの領域だからこそ、参加者も含め、お互いを知り、自身のこれまでを振り返り、立ち位置や強み、そしてコーディネーターとしてありたい姿の再確認となる機会となることを目指します。心理に限らず、あらゆるバックグラウンド、専門性をおもちの方の参加をお待ちしています。

コーディネーターによる当日の様子や感想等

3名の話者提供から、心理職としての訓練や経験、専門性をいかに障害学生支援へと展開してきたか、その歩みや葛藤、支援現場での工夫が語られました。それぞれのリアルな体験に基づく語りは、参加者も深く共感し、参考になることが多かったように思います。また、学生相談や心理支援の経験を基盤としながら、教育・福祉・地域との連携をどう築いていくかについても多面的に議論され、参加者の関心が集まりました。後半のディスカッションでは、大学における体制整備や人材育成、支援職の専門性の継承と発展に向けた活発な意見交換がなされました。コーディネーターが個人への支援を超えて、環境や組織に働きかける力を発揮することの意義が共有され、まだまだ発展途上の領域ではあるものの、その職能は確実に広がっていることを実感しました。終了後には、「自分の専門をどう生かすかを考える契機になった」との声も寄せられ、分科会が相互

の学びを促す貴重な機会となりました。今後は、学生相談や障害学生支援といった領域を越えて、支援専門職同士が互いの実践を共有し、大学という場の共通課題に取り組むネットワークをさらに育てていくことが求められます。心理職の専門性が社会的包摂の推進にどう寄与できるかを問い続けながら、次につながる企画へと発展させていきたいと思います。